

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 2 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520208

研究課題名(和文) 近世初期・前期の近世軍書における生成・展開と流布についての基礎的研究

研究課題名(英文) A basic study on generation, development and spread about the record of the war of the 17th century

研究代表者

湯浅 佳子 (YUASA, Yoshiko)

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：00282781

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：日本近世初期～前期に成立した近世軍書における生成・展開と流布についての基礎的研究として、平成24年度～26年度の3年間、申請書の「研究計画・方法」に記したことに従い、1、作品の流布に関する調査、2、作品の内容に関する考察という2つの視点から、全国の図書館・文庫所蔵の軍書についての内容・書誌調査を行い、データベース化した。成果として、関東の戦乱を記した『北条記』や『鎌倉管領九代記』等についての諸本調査結果や歴史書・文芸書としての位置づけについて報告した。

研究成果の概要(英文)：This study is a basic study on generation, development and spread in the war record of the 17th century of Japan. The study period was three years of the 2012-2014 year. I investigated it in libraries of the whole country and made a database. And I wrote the thesis about a "Hojo-ki" "Kamakura-kanrei-kudai-ki".

研究分野：日本近世文学

キーワード：近世軍書 軍記 出版 歴史 仮名草子 室町時代物語 日本近世文学

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本の室町末期から近世前期にかけて、戦国時代の戦乱に取材した夥しい数の書が成された。それらは「戦国軍記」「近世軍書」と称される、十五世紀末の室町幕府の滅亡から十七世紀初頭の徳川幕府開幕まで、約百年に及ぶ戦乱の時代を舞台に、諸国の合戦や戦乱を期した作品群である。

(2) 近世軍書の研究は 1995 年頃より網羅的な研究が進められてきた。『戦国軍記事典』シリーズや、松林靖明・加美宏・梶原正昭・笹川祥生・長谷川端・若尾政希・阿部一彦らの研究により、諸本の概要や系統が明らかにされ、また諸学問領域との関わりについても様々な指摘がなされた。近世軍書は、歴史書よりは読みやすい歴史読み物として当代の知識人によく享受されていたようであり、文芸や思想・歴史の分野との関係性を明らかにすることで、文芸書として、または啓蒙書としての位置づけをさらに明確にすることができる。

2. 研究の目的

本研究では、日本の室町末期から近世前期にかけて成立・流布した近世軍書についての基礎的研究である。研究の第一点は、作品の流布に関わる調査である。第二点は、作品の内容について、著者の立場、利用された素材・典拠との関係性、諸本の間で生じる内容の変化の意味、作品の再生産の経緯等を明らかにしようとするものである。素材・典拠については、特に近世軍書が近世の文芸や思想、歴史観をどのように享受し、またどのような影響を及ぼしたのかを考察する。

3. 研究の方法

近世軍書の成立の背景と展開の経緯を明らかにするために、(1) 作品の流布に関する調査、(2) 作品の内容に関する調査という2つの観点から考察を行った。今回の研究では、近世軍書のうち、とくに関東周辺の戦乱を扱った作品として『北条記』とその周辺書に焦点を当てた。論者は、『東京学芸大学紀要』第63集(平成22年1月刊行)に、『北条記』(『東乱記』『小田原記』について)という論文をまとめ、『北条記』関連書の分類と系統付けを行った。その際に、国立公文書館内閣文庫・国立国会図書館・宮内庁書陵部・尊経閣文庫・神奈川県立図書館・國學院大学図書館・島原市立図書館松平文庫・金沢大学附属図書館北条文庫・東京大学総合図書館・金沢市立玉川図書館・群馬大学総合情報メディアセンター新田文庫・国文学研究資料館の原本やマイクロ資料を調査したが、今回もその継続的調査を行った。

(1) 室町軍記・戦国軍記と称される作品(写本・板本)について、参考資料をてがかりに網羅的にリストアップし、書誌・内容調査を

行い、データベース化した。そのうえで、特に関東の戦乱を扱った軍書について、諸本の悉皆調査を行い、系統付けと流布状況を調査した。具体的には、後北条氏を中心に関東の戦乱を記した寛永期頃成立の軍書『北条記』とその関連書について調査を行った。『北条記』は、諸本が多く、異本も存在する。写本で流布したが、他の軍書や文芸作品に影響を及ぼした作品として、その生成と流布の状況を明らかにする意味は大きい。

(2) 近世軍書のうち、(1)で注目した『北条記』とその周辺書について、内容的な考察を行った。具体的には、諸本の本文比較を行い、系統付けをし、本文の生成と展開の経緯について調査した。また作品の成立背景、歴史叙述の方法、そして文芸・歴史・思想書との関係についての内容考察を行った。

4. 研究成果

(1) 平成24年度においては、以下のような研究成果があった。

『戦国軍記事典』シリーズや『室町軍記総覧』『日本古典文学大辞典』『群書類従』『通俗日本全史』『新日本古典文学大系』『新日本古典文学全集』『新潮日本古典文学集成』『古典文庫』『戦国人名辞典』『戦国武将合戦事典』『クロニク戦国全史』『戦国大名家臣団事典』『戦国大名系譜人名事典』等の参考資料をはじめ、笹川祥生・梶原正昭・大津雄一・阿部一彦・桑田忠親・井上泰至・倉員正江・柳沢昌紀・江本裕等の先行書や論文をてがかりに、室町末期～近世前期に成立した軍記300作品ほどをリストアップし、書名・成立刊年・著編者・諸本・概要などについてのデータベースを作成した。その上で、必要と思われるものについては、所蔵者の許可を得た上でデジタルカメラ撮影を行ったり、複写物を取得したりした。具体的には『大坂物語』『甲陽軍鑑』『太閤記』『信長記』『信長公記』『朝鮮征伐記』『太平記評判秘伝理尽鈔』『平家物語評判』『本朝將軍記』『將軍家譜』『西国太平記』『甲乱記』『天正記』『北越軍記』『陰徳太平記』『里見記』『里見軍記』『謙信記』『今川記』『北越軍記』『東国太平記』『鎌倉物語』等の作品を調査した。

戦国期の関東の動乱を、後北条氏五代(北条早雲・氏綱・氏康・氏政・氏直)の動向を中心に、それを取り巻く関東公方・管領上杉氏・里見氏・武田氏・今川氏・豊臣秀吉らとの攻防を記した軍書『北条記』(『小田原記』『小田原軍記』『東乱記』『関侍伝記』『鎌倉兵乱記』『関東合戦記』『北条始末記』『相州兵乱記』『関東記』『太田道灌記』)についての諸本調査を以前から行っていたが、今年度も継続して行った。そして、異本の本文の異同をテキストデータとして入力し、本文比較を行った。諸本を、六巻本・五巻本(2種)・九巻本・十巻本・その他に分類し、系統付け

を行った。この作業により、六巻本を始祖とする『北条記』の本文の生成の展開の過程を明らかにすることができた。九巻本の存在もこれにより明らかになった。さらに、『北条記』の一系統である『関侍伝記』のみが、新たな記事をほとんど載せず、従来の諸本の記事を組み合わせるかたちで本文が作られていること、そのことから、『関侍伝記』が『北条記』諸本の生成過程の中で最終段階に位置づけられることが分かった。

『北条記』の関連作品である『永享記』『北条五代記』『豆相記』『中古日本治乱記』『鎌倉管領九代記』『北条盛衰記』『後北条記』『北条五代実記』『甲陽軍鑑』『古老軍物語』等についても諸本調査を行った。特に国立公文書館内閣文庫・国立国会図書館には『北条記』関連の多くの書が所蔵されているため、重点的に書誌調査を行った。調査方法は、原本やマイクロフィルム資料から得られる諸データを書誌カードに筆記し、所蔵者の許可を得た上でデジタルカメラ撮影し画像化させたり、紙焼複写物を取得したりする。その後、データベースとしてまとめ、論文執筆のための資料とするというものである。

近世軍書『北条記』と関連の深い『鎌倉管領九代記』について考察を行った。『鎌倉管領九代記』(九巻十五冊)は、寛文十二年に江戸中野左太郎より刊行された軍記で、室町・戦国期の関東を中心とする戦乱の歴史を、関東公方の九代記(足利基氏・氏満・満兼・持氏・成氏・政氏・高基・晴氏・義氏)の形式で記した書である。本稿では『鎌倉管領九代記』の典拠を明らかにし、どのような方法と意識で歴史を記しているのかを考察した。本作品は、喜連川氏と足利氏の系譜『喜連川判鑑』を基本的な柱とし、暦応元年八月十一日の尊氏征夷大將軍補任から天正十八年の秀吉の関東征伐までの記事を引用している。それに以下の作品が付け加えられる。『太平記』の巻二十六から巻四十の、関東に関する記事。『太平記評判秘伝理尽鈔』の巻二十九から巻四十の、足利基氏を中心とする記事。『本朝將軍記』巻六「源尊氏」から巻十「源義輝」までの記事。『北条記』巻一から巻六の十「氏政氏照最期事」までの記事。『北条五代記』太田道灌の件や北条氏を中心とする記事。『古老軍物語』巻五の十六の龍若の処刑、巻六の十六の北条左衛門大夫の武勇などの話。『甲陽軍鑑』武田信玄、上杉・北条・今川氏に関する記事。これらの話を抽出し、記事と記事とを組み合わせるという方法をとる。また、人物の善悪を際立たせて示したり、評価・批評的な言説を付加したりして、歴史的権力が推移する原因を為政者の善悪にあるとする。さらに虚構を交えながら創作的興味をもって戦乱や人物描写を行っていることも特徴としてある。こうした『鎌倉管領九代記』の歴史叙述の方法は、後

続の『鎌倉北条九代記』へと継承され、歴史読み物としての近世軍書の作り方として定着していく。その点において、『鎌倉管領九代記』は、近世軍書の様式を確立させた作品として位置づけられることを論じた。

(2)平成 25 年度の研究成果は以下のとおりである。

前年度に引き続き『北条記』とその周辺書『北条五代記』『北条五代実記』『北条盛衰記』『後太平記』等の諸本調査を継続して行った。調査した機関は、国立公文書館内閣文庫・国立国会図書館・岡山大学附属図書館・広島市中央図書館・豊橋中央図書館・筑波大学附属図書館・静嘉堂文庫・国文学研究資料館である。そこで書誌調査とともにデジタルカメラ撮影を行い、データベース化を行った。

『北条記』の後世への影響という視点から、『北条盛衰記』(寛文十三年刊、江西逸志子著)についての内容考察を行った。『北条記』は写本のみで流布したが、『北条盛衰記』は、『北条記』を板本化させた唯一の作品である。本書は基本的に『北条記』の数種類の諸本を典拠とし、それらの記事を組み合わせながら著されたものである。『北条記』の一系統である『関侍伝記』も、同様の叙述方法をとるが、こちらは引用文献の本文を忠実に写しているのに対し、『北条盛衰記』には、引用した本文を変えたり、新たに内容を加えたりするという自在な著述姿勢があることが特徴である。また『北条盛衰記』は板を重ねるごとに修訂が行われている。このことについては、平成 25 年 1 月の仮名草子研究会で報告を行った。

(3)平成 26 年度の研究成果は以下のとおりである。

近世軍書全般と、『北条記』とその周辺書についての書誌調査とデータベース化を継続して行った。

『北条盛衰記』の諸本調査を継続して行った。調査したのは、玉川大学図書館・駒沢大学図書館・日本大学図書館・国立国会図書館・国立公文書館内閣文庫・国文学研究資料館の原本およびマイクロ資料である。

『北条盛衰記』について、諸本によって修訂が行われていることに注目し、本文の変化と改編の意図について考察した。『北条盛衰記』は後に『北条五代実記』と改称されるが、『北条盛衰記』の書名の段階で大幅な本文の修訂が行われている。その意図としては、出版規制による徳川幕府への配慮と、よりよい本文を提供しようという意識、そして歴史読み物として読まれるための虚構化があると思われる。このことについては現在も考察中で、いずれ著書にまとめる予定である。

以上のことについての調査・考察を博士論文としてまとめ、平成 27 年度に二松学舎大学に提出、受理された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

湯浅佳子・『『鎌倉管領九代記』における歴史叙述の方法』(『近世文藝』98 号、査読有、2013 年、14 頁。

〔学会発表〕(計 1 件)

湯浅佳子・『『北条記』と『北条盛衰記』』仮名草子研究会、2014 年 1 月 10 日、東京都立川市国文学研究資料館。

〔図書〕(計 4 件)

湯浅佳子他・『近世における啓蒙的文芸の研究』・2015 年・632 頁・(博士論文)

湯浅佳子他・三弥井書店・『天空の文学史』・2014 年・365 頁。

湯浅佳子他・岩田書院・『浅井了意全集 仮名草子編 4』・2013 年・584 頁。

湯浅佳子他・勉誠社・『浸透する教養 江戸の出版文化という回路』・2013 年・453 頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

湯浅 佳子 (YUASA Yoshiko)

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：2 4 5 2 0 2 0 8